

美容芸術学における授業プログラム I

Methodological Analysis for Study of Artistic Beauty

富田 知子¹⁾ 武藤 祐子²⁾

抄録

本報告は美容総合学科 美容デザイン専攻 2年で行う「美容芸術学」の授業報告である。報告は15回の授業の内前半9回と後半6回の内容を分けI、IIとして行う。報告Iでは、美容的感覚の整理と演習を中心に、その方法と結果、IIでは「ヘアメイクデザインプロセス」の実践から完成作品およびアンケート調査を基に、我々が目指す「美容芸術学」教育の授業目標の到達度の検証について報告する。

「美容芸術学」は短大2年目後期に設定され、1年後期に行われた「美容デザイン」で学習した基礎知識を元に進められる授業である。本授業は、美容師としての社会進出、専攻科芸術専攻への進学等を目の前にした時期にあたる。一年半をかけ身に着けて来た美容技術及び理論と、本学特有の美術教育で培った表現力を融合させることを目的としているが、短大の区切りとし社会に出ることを前提に、より実践的なヘアスタイルを題材に授業を進めた。芸術性を高めた造形的と言える美容芸術は、専攻科において確立されることを念頭に置いている。

キーワード：美容芸術 美容デザイン ヘアデッサン イメージ分析 異世代

I. 緒言

山野愛子初代学長の著書に「美容芸術論」がある。その中で「美とは何であるか。そして生きるとはどんなことか。われわれ美容に携わるアーティストは、人の顔や体をキャンバスにして美という架空の創作をするわけだが、その美を実現し創り出すためには、心の飾りと言ったものを捨て去らなければならない」¹⁾と述べられている。これは、常に対象となる人物を純粋な目で見つめ、既にある経験に流されるのではなく、新しい美を提供することが美容師の勤めであるということが含まれているのではないかと考える。美容は人の歴史とともに変化を続けながら、その時代を表現してきた。現在もその変化は続いている。流行にはサイクルがあるといわれているが、全く同じものが同じ組み合わせで出現することは難しい。社会背景と美容との関係を過去から学び、現代そし

て今必要とされるもののヒントを見つけ出す。斬新なデザインも人の記憶の中をくぐり抜け、まだ見ぬものとして作り上げられているのである。1年で歴史様式と美容の関係性を学び、美容の芸術性をすでに記憶に残しているうえでの美容芸術学では、現実の美容としての芸術性を考える。一見表層的とも見える、人の容姿に現代の人の心の要求と形の関係性を見つめる授業としての美容芸術学について報告する。

II. ヘアスタイルを構成する造形要素を知る。

学生たちが、感覚的に感じていることを整理し、イメージを言葉で表現できるようにすることは大切なことである。1年次で学ぶ先行する授業「美容デザイン」では、点、線、面（形や質感）がもつイメージや、顔のパーツの形とその顔の中での位置から生まれる

イメージ、またヘアスタイルのバランスや、髪形毛先の動きによる顔のイメージ変化について学んだ。2年次では、アップスタイル実習授業も始まり、カットとはまた違った角度から頭の骨格を意識する必要がある。アップスタイルは、重力と逆らった形であるため、不安定なバランスを生みやすい。例として、シニオン（髷）を作る際、その形のみでのデザインを意識するばかりに、頭部との関係性を忘れがちである。また複数のシニオンとなるとそれぞれの関係も生まれ、バランスは複雑となってくる。バランスはデザインの要であり顔のイメージを大きく左右するため、頭部、顔のパーツとの関係をしっかりとつかむ必要がある。本授業では、より具体的に東洋人に多い特徴的な頭部骨格の個性に触れ、ヘアスタイルとの関係性などについて教授した。東洋人と西洋人の骨格の違いはヘアスタイルを作る上で、必要な技術も変わってくる。スタイルについては、流行的な側面を強く持ち、変化をつづけ、本授業内で扱うスタイルが、いつまで存在するかは分からないことであるが、全てが基礎的な形を組み合わせているものであるため、学生たちの経験の中で、応用理解は可能であると考えられる。

III. ヘアデッサンの有用性

美容師にとって、形をイメージすることは大切なことである。「美しい」または「カッコイイ」「かわいい」などと表現されるヘアスタイルの成り立ちはどのようになっているのか。ヘアスタイルと顔の関連でそれらのイメージがその成り立っていることを意識することは、難しいことである。いかにその関係性を意識させることが大切である。先行する、「美容デザイン」では、写実的なヘアデッサンを行った。写真をおおまかにトレースし、観察しながら、描いてゆく。美容的指導をないままに描くのでは、描くことにのみ意識をとられ、ヘアスタイルの特性を見抜くことができない場合が考えられる。よって、まず、顔との関係性など、非常に特性が明確なスタイルを選び、そのヘアスタイルがどのように印象を作りだしているのかを説明する（図1）。ヘアスタイルによる顔の印象変化があることは周知の通りである。ヘアスタイルのボリュームの量、方向性、位置、また、毛先の処理方法な

どがその印象を作りだす。そのことを知って、描くことで、スタイルのイメージを頭に描きやすくすると考える。



(図1)

上記の行程を踏まえ、「美容芸術学」では、卒業を目の前にし、将来のカウンセリングを想定し、5分間程度でヘアスタイルを描く「カウンセリングデッサン」を行った。当然5分で写実的に描くことは難しく、またその必要もない。絵画でよく言われるクロッキーに近い表現となる。相手に、スタイルの大切なポイントがしっかり伝わればよいのである。全ては、対象となる人の顔に対して、ボリュームのポイント、長さ、毛先の方向と落ち位置等が描けることは、施術に入る前に、しっかりとイメージが頭の中に構築されていることになる。

実際の美容室の流れの中で、取り入れているところは多くないが、近年そのような美容師向けの講習会が開かれている。必要とされている理由として次のようなことが想定できる。

- ①お客様と写真での理解にとどまらず、描くことで、しっかりと理解していることを伝える、コミュニケーションツールである。
- ②カット技術の展開図と組み合わせることで、技法とスタイルのシルエットのポイントの理解がしやすくなる。
- ③ディテールや色の描き込みをすることで、施術に必要な技術及び材料がイメージできる。

学生の場合、経験年数の長い美容師とは比較の対象ではないが、2年に入るころには、1年間に、美容技術の基礎を終え、応用的な技術の習得へと進み、ヘアスタイルの印象の捉え方も向上している。今年度の本

授業では、彼らのヘアスタイルに対する真剣な取り組みと、新鮮な感覚はデッサン表現を抵抗なく行うことができた。またこの経験から、授業後半の課題にもよい影響が見られた。(図2)



(図2) 学生作品：乙坂悦子作

IV. 感性の整理

「共感」をすることは美容師にとって大切なことである。美容師は被施術者のイメージしているところを正確に感じ取らなければならない。被施術者の持っているイメージがぼんやりとしている場合は、その曇りを晴らすこともしていく必要がある。勝手な思い入れでの押しつけでは、成り立つものではない。色、形、質感などの基礎知識は学習済みの上で、本授業では、現在の人々の美意識の源を見直すところから始めた。

①時代、時間軸の中で作り上げられてきた美意識。

現在のファッションの源流はヨーロッパにある。日本では、20世紀の西洋化を目指した生活の中で、洋服の文化が見事に確立された。ファッションの持つ記号化された意味合いもそのまま定着している。まずは時間軸で使われる言葉である。モダン、クラシック、アバンギャルドとは何を指すのか。間違いなくヘアスタイルにもそれはあてはまるのである。それらは20世紀という近代化、大衆化の中で、ファッションテイストとしてイメージが確立されている。「モダンなヘアスタイル」とは何を指すのか。モダニズムが席卷した時代のミニマルなスタイルこそ、そのイメージとして定着しているのである。テイスト分析をすると、ミニマルなスタイルを(たとえばボブ)をクラシカルなスタイルと考える学生も少なくない。彼らにとって彼らが流行した時代はすでに過去の時代と考えてもおかしくはない。自分の軸ではなく、歴史の大きな流れ

の軸で考えなければ、共通認識にはならないのである。授業の中では、ボブスタイルを例に、その3つの違いを提示した。

A クラシック：マルセルアイロンで装飾デザインされたボブ。

B モダン：ヴィダルサスーンのミニマルで、構築的なボブ。

C アバンギャルド：カットのつながりを崩した有機的なラインを持つボブ。

ボブスタイルは20世紀に入り女性の自立と共に取り入れられたスタイルであるため、20世紀の中でいかに、イメージワードが確立していったかが理解しやすいと考えた。

② 環境の中ではぐくまれた美意識。(地域性)

①で記したように、長い歴史の中でファッションの中心はヨーロッパであった。特に19世紀にはイギリスをはじめとした国で、万国博覧会が行われ、異国の文化が紹介されていく。そのような中で、「シノワズリー」「ジャポニズム」「エキゾチック」『エスニック』「フォークロア」「ボフェミアン」などヨーロッパを中心に見た世界を表したその言葉は、現代のファッション用語として使われるようになってきた。本授業ではそれぞれの言葉を地図上で確認し、写真をもって重ねて理解するようにした。日常使われるその言葉は、何を表しているのかを知ることが、そのファッションの背景を知ることとなり、テイストのミスマッチをさける、また新しい発想へとつながるものである。

③言葉の示す価値観、性差を知る。

ファッション、ヘアスタイルの雰囲気表現する言葉は数えきれないほど存在する。特に多く出現する、エレガント、カジュアル等は価値観をフェミニン、マニッシュ等は性差の表現を感じさせる。思想的な意味合いも含め、コンサバ(保守的な)等は頻繁に使われる。ヘアスタイルについては、同じカテゴリーのスタイル(例えば、ロングレイヤー、毛先カール)のものでも、毛先の処理、ボリュームの出し方等で、コンサバ・フェミニン、コンサバ・エレガントの表現のように分類されていく。近年のファ

ションアは、複合的でテイストが複雑に組み合わせられて出来ている。20世紀末に、バブルの崩壊とともに、ファッションのルールは崩れた。既存価値観を崩し、新しい方向性を見出してきた21世紀の初頭からの流れは、現在では、日常の中に浸透し、学生たちは、苦も無く複雑な組み合わせを感覚的にこなしている。美容師として、多種多様な人々のファッションの価値観の一部を担い、それと向き合うとき、複雑な価値観の組み合わせを感覚的だけではなく、それらの意味するものを知り、裏付けをもって理解しなければならない。本授業では、ファッションおよび美容界で頻繁に使用する代表的な用語の意味とその言葉のバックグラウンドを説明し、その言葉と対応する写真を組み合わせることでその理解の一助とした。

V. 人を理解する I—雑誌を利用した異世代の理解

ここで扱う美容芸術は、人があって成り立つ美である。人の生き方は多様であり、年齢、ライフスタイルによって求める美しさは違うものである。美容師としてお客様の求める美しさを理解しなければならない。

学生は卒業し、美容師になると、あらゆる異世代のお客様と接する必要性生まれる。仕事の中で、世代の違いを苦手ということで、関わりを持たないことはできない。実際に美容室で若手の育成のプログラムの中で、異世代を理解するための教本が出版されている。今回はその教本のプログラムの方法を参考に授業に異世代の観察を取り入れた。

学内においては、異世代は少なく、観察はむずかしい。また一個人の調査には偏りもでるため、世代を絞り、コアターゲットを明確の設定している雑誌を利用することとした。現在、女性のファッションに関わる雑誌は、20世紀の初頭に刊行されてから、1970年代のファッションの個性化とともに細分化し、その数を増やしていった。現在女性をターゲットとした雑誌は100を超えるといわれ、ほかの国には類を見ないほどの刊行数である。それほどに、雑誌は日本人にとって生活に密着したものとなっており、ファッションの流れをそれによって左右されていくということが考えられる。大きな流行の中にある美しさはもちろん大切

であるが、それぞれの世代に必要な美しさは別に存在しているといつてよいであろう。一言に「美しさ」といっても、ライフステージの中での要求、年齢による容姿の変化の中での要求と様々である。それを雑誌は明確にくみ取り、素早く提案しているのである。そのような点において、雑誌を使用することは、有意であると考えられる。

雑誌の分析を前に、おおよそのファッションジャンル（例：ハイファッション系やエレガント系）と、それらのカテゴリーに属する女性たちのおおよその動向や好み（ショッピング・エリア、購読雑誌、ヘアスタイルの傾向）について説明をした。

次に、10代、20代、30代、40代、50代以降をターゲットとした雑誌、また年齢のセグメントより、ファッションの主張を強く出しているものも含め53冊用意した。それらの雑誌の表紙の小さいコピーを制作し、雑誌それぞれの位置づけを確認する。縦軸に年齢（10代以降）、横軸にテイスト（コンサバ⇔ナチュラル⇔アバンギャルド）に設定し、雑誌の表紙を張り込んでいく。ナチュラルを中心に大きく二つの流れが現れ、上に行くほどにつれスタイルが明確になっている。その大きい方向性もスタイル提案の助けになる。

(図3)



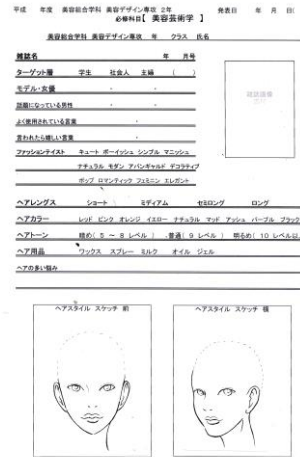
(図3)

次にそれらの雑誌の中から、世代とファッションテイストを考え、18冊の表紙の小コピー改めて用意し、学生はくじ引きで引き当てた雑誌の調査用紙に沿って(図4)下記の項目について調査行う。

- 1：雑誌名
- 2：ターゲット層
- 3：モデル

- 4：話題になっている男性
- 5：良く使用されている言葉
- 6：ターゲットが言われたら嬉しい言葉
- 7：ファッションテイスト
- 8：ヘアレングス
- 9：ヘアカラー

ここで特に注目したい点は、5にあげた「良く使用されている言葉」である。若年層が言葉の短縮等の新しい表現を好むのは周知のとおりであるが、40代50代と以前は保守的表現が主流であった年代層の雑誌でも、頻繁に造語が作られている。例えば、近年よくみる「40代女子」等の造語は、「中年期女性＝女子」という意味を含み、その世代の気分を表現している。まだまだ未完成で、変化することを楽しめる年代でると感じるのである。このように、それらは学生の同世代の中からは、感じ取れないものである。またどの世代にも同じ髪長さ、同じ髪の色等を見ることはできるが、それらを必要とする背景が違うのである。世代の変化は、体型、体質の変化につながり、これを背景とし、必要なデザインが決まってくる。これらのことを知ることは、必要な技術を引き出す手がかりとなり、会話のヒントともなる。これらのことを知ることに、学生が現段階で強い必然性を感じ続けるのは難しいことであるが、ここでこのようなアプローチで雑誌を活用する経験をする必要があると考えた。この調査票には、多く見られるヘアスタイルのラフデッサンをするスペースがある。これは前段階で行った5分デッサンともつながり、スタイルの観察をさらに慎重にする手段となる。この調査の結果は、PDFに各自プレゼンを行い共有した。



(図4)

VI. 人を理解するⅡ－同世代間の調査

前半の最後に、同世代間の調査を調査票に沿って行った。(図5) 今回はランダムに自分の身近な人の調査としたため、調査対象は重複した人物である場合もある。この調査の目的は、同世代間におけるの共通性と多様性の両面を知るためである。今回は調査しやすい人物を選択しているが、調査結果をプレゼンテーションすることで、多くの情報を共有することができる。調査内容にある項目については、①生活、②ヘア、③メイク、④ファッション其々につき幾つかの設問がある。調査票には、全身と上半身の写真を貼るスペースがあり、雑誌の調査票とともにPDFで保存し、プロジェクターで投映し行ったことで、情報と人物のイメージは合わせて理解しやすいものになっている。発表の後、写真でファッションテイストのマッピングをし、本学のファッションテイストの傾向について考察してみた。どのクラスにおいても、開講期の季節に関係していると考えられるが、ポップ系が少ない傾向があった。ヘアスタイルについては、ロングストレートが多い傾向にあった。その他の細かい集計は、先に述べたように重複している人物もいるため、正確には出ない。しかし、自ら人にインタビューを行い、データを集めるという経験が大切だと考える。この経験は、後半のモデルの制作実習で、その人のどのような点に注目し、その人らしさを導き出すのかという行程につながる。

平成 年度 美容総合学科 美容デザイン専攻 2年 履修日 年 月 日)
 必修科目【美容芸術学】 履修日 年 月 日)
 美容総合学科 美容デザイン専攻 年 クラス

モデル名 美容 学科 専攻

選んだ理由
 よく買いたい物に行く街
 一ヶ月のお小遣い x
 趣味
 継続理由

ヘア
 髪型 前髪 後ろ髪 髪色
 髪質 髪量 髪質改善
 髪型 前髪 後ろ髪 髪色
 髪質 髪量 髪質改善

メイク
 メイクアップ メイク マイクアップ マイクアップ
 マイクアップ マイクアップ
 マイクアップ マイクアップ
 マイクアップ マイクアップ

ファッションテイスト
 ティスト ティスト
 ティスト ティスト

(図5)

VII. 考察

本授業の全行程はすべて人を知るためであったといつて過言ではない。さらに、その全行程を踏まえ、後半実習に繋げていく。後半では2極のイメージとして、イメージアップ、イメージチェンジを一人のモデルで行うこととなる。これもまた一人の人物を観察することの大切さを知る課題である。

今回の授業を終えて、まず感じたことは、本学の学生の美容力である。どの工程についても、美容の基礎知識、技術、美的感覚のバランスが必要である。美容師として現場で積み上げる経験はさらに彼らの力を大きくすると考えられるが、その前提になる力、美容力は、この2年間の本学のあらゆる授業が学生の中で繋がり、確かなものとなったと考えられる。

学生の調査結果については、比較対象がないため、集計するにとどまり経験としての調査となった。来年以降、その方法も検討し、より多くのものを得ることのできる授業にしていきたい。

最後になりましたが、授業を進めるうえで、雑誌の閲覧等に図書館司書の林きよこ様、松崎薫様のご協力を頂き無事に行うことができましたこと感謝申し上げます。

引用文献

1)美容芸術論 : 山野愛子著 IN 通信社 p303

参考文献

1) The Secret Methodology of the Analysis of an Image for Women 有村さんの秘策本：有村雅弘著 髪書房出版
 2) 美意識の芽：五十嵐郁雄著 株式会社蟻牙スピリッツ